

OTの臨床実践に役立つ理論と技術 —概念から各種応用まで

藤井 浩美

(山形県立保健医療大学, 教授)



日本の作業療法教育は、1963年(昭和38年)5月に開学した国立療養所東京病院附属リハビリテーション学院から始まりました(2008年3月閉校)。したがって、日本の作業療法教育は、今年で満50年を迎えます。その節目の年に、作業療法ジャーナル増刊号「OTの臨床実践に役立つ理論と技術—概念から各種応用まで」が発刊されたことは、とても意義深いことと思います。私の学生時代や新人時代に、このような書籍があったならば、私の臨床はさらに充実していたことでしょう。

編者の高畑進一氏は本書の目的を「多くの臨床家に作業療法と関連の深い理論・技術の概要を示すことである」と述べております。また、「各理論・技術の成立過程と変遷、適用範囲(対象とする疾患や障害)と限界、具体的方法とエビデンス、今後の展望等について解説いただいた」とあります。より所とする理論と技術があることは、作業療法の専門家として重要ですが、同時に「専門バカ」に陥る危険もあります。「専門を極める」とは、広く関連領域を把握することと表裏一体の関係です。このような視点で本書を読み進めました。

はじめに、高畑氏が言う「新たな認識(気づき)」の重要性に強い関心を抱きました。OTの臨床に役立つ理論と技術を把握するには、さまざまな臨床経験を通した「気づき」が必要です。臨床にお

ける気づきは、個々のOTの視点であるため、新しい(ノイエスneues)発見の糸口であるにも関わらず、あたり前のことと思ひ込むことがあります。本書が作業療法に関連する種々の理論と技術をダイジェストとして網羅した点は、私たちの気づきにノイエスを与えるうえで、大いに意義があります。

さらに本書の存在意義を際立たせる内容は、理論の成立過程を丁寧に解説した点です。この内容は、OTのみならず他専門職の方々にも役立つものです。本書の中で「実践なき理論は空虚であり、理論なき実践は盲目である」の引用は、一教育研究者である私にとっても、日ごろから肝に銘じている名言です。それ故に、理論と技術の向上には、弛まぬ臨床研究が重要であり、本書の端々からその意図を読み取ることができます。

次に、各論において30を超える理論と技術を掲げたことに共感しました。作業療法の実践は、その専門性から多岐にわたるため、一つの理論や技術だけでは対応できません。本書はそのことを具現化しており、広く関連領域に目を向けることの必要性を示しております。第2章の「中枢神経系に関するもの」から始まり、第7章の「さまざまな疾患に適用となるもの」まで、疾患からまとめられた理論と技術がある一方で、方法からまとめられた理論と技術が紹介

されております。その多様性こそが、作業療法の専門性です。

おのおのの理論と技術を紐解くと、作業療法の歴史と共に歩んできた理論と技術が数多く紹介されております。他方、ここ数十年の間に構築された理論と技術も紹介されております。老若男女の生活再建がOTの役割であれば、理論と技術も時代の要請に応じて発展しなければなりません。各論で理論と技術を紹介した著者は、それぞれの分野で中心的に活躍されている方です。その方々の知見は、引用文献からも類推できます。理論と技術の原典となる文献のみならず、最新の知見を取り入れた理論と技術は、これからの発展を予感させます。

最後に、第8章の「理論・技術のコラボレーション」での討論に斬新さを覚えました。おのおのの理論と技術の共通点と相違点を明確にし、それを皆で共有することは、専門職の発展に不可欠なことです。それは高畑氏が言う「科学的思考と態度の必要性」であり、「当事者や家族の主体的な取り組みやエンパワメントを促す理論・技術」であると思います。

以上のように、本書はこれまでにない切り口でまとめられた興味深い内容となっております。ぜひ、ご一読することをお勧め致します。

〔 B5判 266頁 3,800円+税 〕
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357